亡き人を〈悼む〉こと、「死者」を忘れること

加藤秀一
kato shuichi

「死者」という言葉は誰を指すのだろうか。死んだ人はもうどこにもいないのに。だからこそ「死者」と呼ばれるはずなのに。

親しい人、愛しい人、あるいは憎しみの対象ですらも、そうした身近な人を喪ったとき、私たちは悲しみ、あるいは嗤い、残された人々と語り合い、そして届かぬ声と知りつつも、亡き人に呼びかけ、ときには呼びかけられる。そのようなとき、なお生き続ける私たちは、何を求めているのだろう。天童荒太の小説『悼む人』の登場人物はこう答える。「ぼくは、亡くなった人を、ほかの人とは代えられない唯一の存在として覚えておきたいんです。それを〈悼む〉と呼んでいます」。

二〇一一年の震災のあと、亡くなった被害者と束の間の再会を果たした人たちがいるという。三歳のわが子を津波で喪った女性は、震災後しばらくのあいだ、感情をなくしてしまい、涙一つこぼせなかった。ところが二年が経過したある日の食卓で、祭壇に飾ってある亡き子の写真に「庚ちゃん、こっちで食べようね」と声をかけた瞬間、「庚ちゃんが大好きだったアンパンマンのハンドルがついたおもちゃの車が、いきなり点滅したかと思うと、ブーンと音を立てて動」き、家族皆が「アッ、庚ちゃんだ」と叫んだのだという。庚ちゃんは「こんな近い距離で私たちを見てるんだ」――そう思ったことをきっかけに、彼女は少しずつ笑顔を取り戻すようになったのだった（奥野修司『魂でもいいから、そばにいて――3・11後の霊体験を聞く』新潮社）。

奥野修司はこの語りを受けとめて、そのとき「生者と死者の垣根」が消えたのだと言う。被災者たちの思いと真摯に向き合った著者の切実な言葉をことさらにあげつらうつもりはない。けれども、そのうえでなお、「庚ちゃん」を「死者」に置き換えることができるのは傍観者の特権であることを忘れないようにしたい。私たちが心底から〈悼む〉のは「庚ちゃん」という呼びかけの先にいるはずの誰かであって、断じて「死者」などという抽象概念ではないからである。

私たちは、亡き人を、もうどこにもいないにもかかわらず、もうどこにもいないからこそ、狂おしく追憶し、再会を願う。だがそうした思いも日々の生活のなかで少しずつ薄れてゆき、やがて私たちの最後の者がこの世界から去るときには、それと一緒に消え去るだろう。ただそれだけのことであり、そしてその事実のいかなる隙間にも、「死者」などという概念が入り込む余地はない、いや、入り込ませてはならないと、私には思われる。これは、戦争の「犠牲者」を国家が主体となって「追悼」することへの疑義を述べる村井吉敬の「人の死はその人を知っている人たちの範囲で追悼するものではないのか」という言葉にも通じる立場であろう（高橋哲哉・李泳采・村井吉敬・内海愛子『犠牲の死を問う――日本・韓国・インドネシア』梨の木舎）。

だが、ただ一つずつの喪われた名前をではなく、「死者」について、あるいは「死者」の名の下に、雄弁に語る「生者」が絶えることはない。かれらは決して反論しない「死者」を――それこそが、死ぬということの意味なのだから――狂言回しに、安んじておのれの意見を開陳する。とりわけ三・一一以降、そうした声はますます喧しくなっているようだ。最近では、いとうせいこうと中島岳志による対談「死者をないがしろにする日本はおかしすぎる」（『東洋経済オンライン』二〇一八年四月九日）がその典型である。中島はそこで、いとうの小説『想像ラジオ』に言及して、次のように言う。

> 「いつからかこの国は死者を抱きしめていることができなくなった。それはなぜか？」という一節があります。死者の世界は、霊界のようなものとして単独にあるのではない。生者がいるから死者が存在していると。だから、生きている人類が全員いなくなれば死者もいなくなる。いま生きているというこの社会の中に、死者という構成員が含まれている。そういう考え方だと思うんです。

私にはこの発言の論理をうまく辿れないのだが、ともあれ見逃しようがないのは、『想像ラジオ』の一節が――天童荒太の言うような「ぼく」ではなく――「この国」という集合表象を主語にしていることだ。その空虚な主語を「死者」という抽象概念に結びつけておきながら、「抱きしめる」という擬人法の温もりで糊塗することで、いとうはその危うい警句にヒューマニティの風味をまとわせている。だがそれがいかに巧みなレトリックであっても、「この国」という得体の知れない主語を戴く限り、〈悼む〉という営みからは遠く離れた所作でしかありえない。なお補足しておくならば、この対談中の別の箇所でいとうは「死者の声」が「国家」という「イデオロギー」で覆われている現状を批判しているのだが、これはあからさまな矛盾ではないか。あるいは、「国家」と「この国」は別物だということだろうか。だがそのような区別によって国家主義を免れようとすることは姑息であるだけでなく、政治的であることを隠した政治という、よりいっそう危うい領域に「死者」を追いやることではないのか。

それでも中島といとうは、この対談では、「生者がいるから死者が存在している」という常識に係留してはいる。「忘却」という言葉遣いからも、「死者」は「生者」の記憶のなかに住まうという穏健な考えを読みとることができる。この自明と思われる事実をあえて確認したのは、別のやり方で「死者」の存

在論を語ろうとする人たちもいるからだ。霊魂や幽霊の実在を本気で信じているオカルティストたちは別としても、英語圏の分析哲学者のなかにも、人は死後にも実在（exist）しうると主張する人がいる（Stanford Encyclopedia of Philosophyの“Death”の項を参照）。

日本におけるその代表格は、仏教学者の末木文美士である。過去十数年の「死者」論を精力的に領導してきた末木は、「〈死者〉と〈死者の記憶〉はまったく違う」ものであり、「死者は〈経験〉される」ことを力説する。さらにそこから、靖国神社問題等に即して「死者の記憶」を論じる哲学者の高橋哲哉に反論する文脈で、「〈死者〉の慰霊とは、所詮は自己の内なる〈記憶〉にどう対処するか、という問題に帰するというのであろうか。そうではないはずだ」と言い切るのである（『他者／死者／私』岩波書店）。

だが私には、この力強い断言に見合うだけの確たる論拠を末木の文章のなかに見つけることができない。たとえば末木は、記憶ならやがて薄れるはずなのに対して、「〈死者〉は私の努力に関わりもなく、忘れようとしても迫ってくる」と言う。しかし、戦闘や性暴力被害のトラウマ的記憶がいつまでも薄れてゆかずに被害者を責め苛むことは、今日ではよく知られている。末木の論法は、記憶という概念を矮小化しすぎているのではないか。

それだけではない。末木はさらに次のようにさえ言うのだ。「もし〈死者〉が〈死者の記憶〉に過ぎないのならば、今目の前にいる、生きている（と思われる）あなたも、〈生者の映像〉に過ぎないのではないか」（前掲書）。これは驚くべき主張である。この命題が成り立つためには、「ならば」を挟む前件の「〈死者〉」と後件の「あなた」が本質的に同種の存在者であるということがあらかじめ確証されていなければならない。だがそのような事実はどこにも示されてはいないし、示せるはずもない。「〈死者〉」という記号がどのような存在者を指すのであれ、その何ものかは飢えと渇きに苦しむことも、血を流し、肉を腐らせながら息絶えてゆくこともない（もし比喩的な意味でなく文字どおりにそういうことがあるとするならば、われわれは死という概念そのものを放棄するしかなく、その場合には戦争も飢餓も大したことではなくなるだろう）。だからこそわれわれは、しばしば死を救いとして、苦からの解放として甘受するのだ。生者と死者の断絶というこの端的な事実を認めるならば、くだんの等式のトリックは明らかだろう。〈死者〉が〈死者の記憶〉に過ぎないとしても、生者も〈生者の映像〉であるなどということにはならない。ここには些かの矛盾もない。

それにしても、末木がらしからぬ乱暴な論法をふりまわしてまで「死者」を「生者」に重ね合わせようとし、いわば死者もまた生きているといわんばかりの立場に限りなく接近していくのはなぜなのだろうか。おそらくここには、末木や中島・いとうだけでなく、〈日本の思想〉全般の肝と言うべき重要な問題が潜んでいる。ここでその全貌を照らし出すことは到底叶わぬ課題だが、せめてそのための備忘録となることを期して、この〈死＝生〉という胡乱な等式の源泉というべき京都学派の哲学者・田辺元の「死者」論を概観してみたい。

〈死＝生〉という等式こそは、田辺がその生涯の後半に追究した「死の哲学」の核心に位置するものである。「歴史に於て個人が国家を通して人類的な立場に永遠なるものを建設すべく身を捧げる事が生死を超える事である」――このように華麗なレトリックを用いて、多くの学生たちを前に〈国のために死ぬこと〉を宣揚した一九三九年の講義『歴史的現実』から、晩年のテクスト群における「死復活」の教義（『死の哲学――田辺元哲学選Ⅳ』岩波文庫）に至るまで、そのことは本質的に変わらなかった。たしかに戦後の田辺は、もはや『歴史的現実』のように「国家」のための死を鼓舞することはなかったけれども、個としての死を経てより大いなるものの

一部へと転移し永遠の生を得るという構想そのものを手放すこともまたなかったのである。この思想的核心において、田辺は微塵も「懺悔」などしてはいなかった（この点については、『思想』第一〇五三号に掲載された合田正人との対談における杉村靖彦の鋭利な発言が大いに参考になる）。

死こそが永遠の生への道であるというこの種の思想は、しかし独り田辺元だけのものではないだろう。むしろそれは、今も私たちの多くが心の底で希求する境地ですらあるかもしれない。そうでなければ、人々を国家と戦争に動員するためにそれを利用することなど不可能だっただろう。

最近観たドラマ『高い城の男』（Amazon製作）のなかに、印象的な一場面があった。――一人の人望篤い医師が不慮の死を遂げる。その追悼の席上、オルガンの厳かな調べが流れるなか、聖職者とおぼしき男が、参列者たちに壇上から語りかける。……死は悲しいことだが、それだけではない。個人の生命は必ず終わるけれども、亡くなった医師のように人々のために生きるならば、小さな種子は永遠に私たちの共同体の泉となるのだ。死は命をつなぐ。

そして男は、その美しい哀悼の言葉を締めくくって言う。――死者の血と彼が愛した者たちの涙は、帝国の地を豊かにするでしょう。未来永劫にわたって。

ハイル・ヒトラー。（全ての参列者の声が唱和する。）

これは、第二次世界大戦でナチス・ドイツと大日本帝国が勝利したら……という架空の歴史を描いたP・K・ディックの名作SFを下敷きにしたものである。架空の大ナチス帝国であれ現実の大日本帝国であれ、その地に生きる大半の血も涙もある普通の人々にとって、死者が「共同体」の――田辺なら「実存協同」と言うだろう――なかで永遠に生きるという教説は、死者に対する喪失感や罪悪感を慰撫し、おのれの死への不安を鎮めてくれるものであるのかもしれない。だがそのようにして「死」を、「死者」を讃えることは、つねに次なる死者を、よりいっそうの死を呼びかけるということでもあることを忘れるべきではない。『歴史的現実』の末尾近く、田辺は言う。「歴史に於て永遠なるものの建設に身を捧げ、かかる境地を実現した個人は、同時に他の個人を覚醒せしめる力をもつのである」。国家のため、民族のため、あるいは何にせよ、傍らの個人以上の何かのために命を捧げた者の姿は、「他の個人」にも死地へ赴くことを決意させずにはおかないのである。

だがここで生者たちを次なる死へと誘惑しているのは、実際に「身を捧げ」た人々自身よりも、むしろ傍観者の地位から声を張り上げる田辺元のようなイデオローグの方ではないのか。そのようにして死を讃えるとき、その話者自身は紛う方なき生者である。かれらはしばしば死者に成り代わってその「無念」を語り、そうすることで生者たちをさらなる死へと呪縛しようとするが、自らは一度も「共同体」のために死んだことなどない以上、それは「死者」という非在者を傀儡としておのれの呪詛に権威づけする〈非在者の騙り〉でしかありえない（拙著『〈個〉からはじめる生命論』）。

私たちはそのように忌わしい〈騙り〉に抗うために、むしろ「死者」という概念を忘れることを試みることができないだろうか。ただひとつの顔と声をもつ近しい人々との束の間の生よりも、「生死を超えた」「永遠」の方が優れているという奇妙な価値観は、いったいどこから来るのだろう。いや、それは人々のほんとうの願いなのだろうか。少なくともこの私がほしいのは、喰い、貪り、愛し、触れ合い、憎み、励まし、去る、そんなありふれた日々だけだ。そこには顔のない「死者」のための場所などはない。

（かとう　しゅういち・明治学院大学社会学部教授）
著書に『〈個〉からはじめる生命論』など